現代日本戯曲大系 2

現代日本戯曲大系

三一書房編集部編

現代日本戯曲大系　第二巻　定価三八〇〇円
一九七一年六月十五日　第一版第一刷発行

編　者　三一書房編集部
発行者　田川敬吾
発行所　株式会社三一書房
東京都千代田区神田駿河台二の九
電話　東京（二九一）三一三一～五
振替　東京八四一六〇番
郵便番号　一〇一
印刷所　第一印刷株式会社
製本所　株式会社鈴木製本所

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします

収録作品の上演については、必ず著者または
著作権継承者に了解を得て下さい。

0393-711702-2726

現代日本戯曲大系／第二巻／目次

1949

人間製本……鈴木　政男　七
火宅……三島由紀夫　一五〇
女子寮記……山田　時子　一九五

1950

崑崙山の人々……飯沢　匡　九七
椎茸と雄弁……岸田　国士　一〇七

1951

しんしゃく源氏物語……榊原　政常　一三
乞食（かんじん）の歌……津上　忠　一三九

1952

卒塔婆小町……三島由紀夫　一四八
冒した者……三好　十郎　一五六
死んだ海（第一部）……村山　知義　二〇七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1953

日本の気象……久保　栄　二四七

1954

制服……安部　公房　三〇八
ひかりごけ……武田　泰淳　三三九
馬五郎一座顚末記……真山　美保　三五一
城館……矢代　静一　四〇四

1955

鋏……田中　澄江　四二一
褌医者……中野　実　四二九

解説……福田　善之　四五七
解題・付作品一覧……四七三
演劇略年表（1950～1954）……四九三
装幀　坂口顕

凡例

○作品は初稿雑誌発表年月（但し活字発表のない作品は初演年月）を基準に、同年内では作者名の五十音順に配列した。なお、年号は西暦で示した。

○作品は原則として新漢字新かなづかいにあらためた。

○明らかな誤字・脱字は訂正したが、送りがな・表記の不統一は原文どおりにした。

○文中の＊および注番号は原文に従い、該当作品末尾に注釈として付した。

○幕（場）数、登場人物・時・所の表記は原文どおりにした。

現代日本戯曲大系　第二巻（1949～1955）

人間製本

四幕五場

鈴木政男

人物

白石靖造　五一歳
ふじ　その妻。四三歳
徹男　長男。二三歳。太陽印刷青年部長
愛子　長女。一五歳
藤男　弟。一二歳
坂田金蔵　四六歳。製本工場主
竹内　貢　二六歳。右製本工
道子　その妹。二一歳。太陽印刷婦人部委員
関田　三六歳。製本断截工
沼沢　四六歳。製本工
年配の製本工　五五歳。通称、甚さん
宮野　二二歳。綴工
おくめ　四三歳。製本工場の女工
春子　二三歳。右同
ふみ子　二〇歳。右同
澄子　一八歳。製本工場の女工
かづ子　一九歳。右同
中川　三四歳。右、事務員兼主任
清吉　五〇歳。右、運搬屋
女事務員　一七歳
製本工A　二七歳
製本工B　三四歳
古山はつ　四九歳。内職をする内儀
高橋ちかよ　四二歳。右同
野口　二八歳。太陽印刷闘争委員
水沼　三六歳。右同。書記長
須山　二九歳。右同。情報連絡部員
大谷　二七歳。右同。調査部長
浅川　二一歳。右同。青年行動隊員
大村　二三歳。右同
斎藤　二五歳。右同
その他、太陽印刷の組合員大勢

時　一九四七年一月
所　東京

第一幕　坂田製本工場

舞台。坂田製本工場の一部。かげは道路で工場の硝子戸越しに、向い側の家並が見える。下手よりに入口。
下は土間で正面中央に断截機があり、断截工の関田が断截をやっている。そのあたり一面に、雑誌を切断した切りくず。
下手前方に、丁合いと折りをするための作業台が三つほど。台の上には雑誌を糊付けするのに使う木の糊箱と刷毛。そのまわりには未成品の

折り本がうず高く積み重ねてある。作業台では年配の製本工がひとり丁合いをやっている。春子が丁合いの終ったものからそれを糊付けしている。ふみ子がそれを綴機のそばへ運んでいる。断截機前方の中央の土間では、古石油かんへ穴を空けたのに切りくずを燃やしながら竹内、おくめ、沼沢の三人が股火をしてあたっている。上手には簡単に仕切られた事務所が見え、そこから坂田の本宅へ通じる。事務所で主任兼会計係の中川が、女事務員と算盤をはじきながら給料袋へ金をつめている。二人はときどき話し合うが、観客には聞えない。事務所前方の針金綴機のそばに、綴工の宮野、澄子、かづ子の三人が機械を停めて話し込んでいる。——この職場は、観客席にも続いている心持ち。機械の音にまじって、工場の雑音。女たちの明るい笑声のうちに幕上る。

澄子　——ばかねえ。(笑う)知りもしないくせにあんなこと言ってるわ。

宮野　ほんとだよ！　嘘だと思ったら、今度おれと一緒に行ってみな。

かづ子　(笑いこけて澄子へ)ね、ね……新ちゃんのダンスってのはね。(手振して)アラ、エッサッサーの安来節よ。

澄子　(腹を抱えて笑う)

宮野　ばか言え！　(まねをする)クイック・クイック・スロウ！　おい、ちょっと教えてやるよ。(いきなり澄子の体を抱きよせる)

澄子　(とびのいて)ワア、すごい！

かづ子　(くくっと笑いこける)

竹内　おい。今日はこれもらえるだろうな。(指で輪をつくる)

おくめ　いま勘定して袋へつめているよ。

関田　(断截をやめて火のそばへくる)

おくめ　あたしなんざ、休んだうえに前借りしてるから、芋の五貫目も買ったらおしまいさ。

竹内　こういう世の中になっちゃあなア、いくらもらったって……もらうまでの楽しみだな。

おくめ　あんたなんかまだいいさ。おあしとはよく言ったもんだよ。みんな足がついて飛んで行くってさ。

沼沢　ははは。ほんとだ。おくめさんはうまいことを言うよ。

かづ子　ねえ、宮野さん。そこへ何回通ったの？

宮野　まだ三回だよ。

澄子　そーれ、見なさい。とうとう白状したわ。

宮野　こうやってくるっと廻るとこがね、ばかにいいんだよゥ。

かづ子　あきれた、ばかねえ……

竹内　こうなってくると、毎日何のために働いてるのか、わからなくなってくるよ。

関田　勘定日って言うと、昔は何となく気持が弾んだもんだがよ……焼けちまったが、(沼沢へ)そら、神楽坂裏の「梅幸」でさ……

沼沢　うんうん。牛鍋つついて二三本飲んだって五円もありゃ大威張りだったんだからなあ。

竹内　昔は安く飲めたんだろうなあ。

関田　勘定日って言うと、判で押したように行ったもんさ。なあ沼さん、それで帰りにゃいい機嫌で、餓鬼へ土産の一つも買って帰ったんだからなあ。

沼沢　いやな世の中になったなあ。

竹内　おれア、そんな味も知らずにしまったよ。これからやっと面白い生活が出来ると思ったら、召集で引張られてさ。

おくめ　竹さんぐらいの若いものは可哀想だよな。吉原の「お酉様」も知らないって言うんだから……

宮野　これから——なんだぞおい。ダンスも知らねえなんて女の子ははやらなくなるぜ。

かづ子　はやらなくたっていいわよ。ダンスなんてあたし嫌いだわ。

宮野　嫌いだって、踊り方を知らねえんじゃないか。

澄子　そんなもん、知らなくてもいいわよゥーだ。

運搬屋の清吉。急ぎ足で土間へ入ってくる。

清吉　うう寒い、寒い。こう寒くっちゃアやりきれねえや。(火のそばへ来てあたる)

沼沢　清さんも、毎日外廻りじゃ大変だな。

清吉　ああ。仕事となりゃ仕方がねえが、あんまり楽な商売じゃねえなあ。

おくめ　清さんは体が丈夫だからいいじゃないか。頼もしいよ。

清吉　なに言ってけつかるこの婆ア、こっちはそれどころか……(断截くずを持ってきてくべる)

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

宮野　おい、教えてやるったら。（澄子の手を取って引っぱる）
澄子　いやよ、あたし……（逃げまわる）
宮野　そいじゃかづちゃん教えてやらあ。（手を取って）こうやってね、クイック、クイック、ス……
中川　（事務所からのぞいて）宮野君！
宮野　（頭をかいて）ちぇっ！
澄子　（小声で）そーれ見なさい。
おくめ　けむいよちょいと。そんなにくべちゃ……
関田　なんでも毎日の仕事となると楽じゃねえなあ。
清吉　おれもこの年になって、こんな運搬屋をやろうとは思わなかったよ。
関田　清さん。こう寒いと傷痕がいたむだろ？
清吉　ああ……（第二関節から切断された左手の指を撫でさする）
竹内　（清吉の手を押えてつくづくと眺める）ひでえなあ……
沼沢　三月もかかった怪我だからな。いくら固まったって言ったって……
関田　（ふり返って）どうもあの断截機は危ねえからなあ。ちょっとうっかりしてると、さーッと包丁が降りてくることがあるんだよ。
竹内　おやじにそう言って新しいのと替えてもらえばいいんだよ。二度あることは三度あるで、また手を落したんじゃ合わないぜ。
関田　ちょいちょい言ってんだがね。新しい機械でやるのは誰もやる。癖のある機械で能率を上げんのが職人の腕だっていうのがおやじの言分さ。
竹内　ふん。指を落したのが本人の腕のせいにされて、雀の涙みてえな見舞金で恩に着せられちゃかなわないからな。
清吉　関田さんも気をつけたほうがいいよ。おれアもう、二度と断截はやる気がしねえ……
宮野　きょう連れてってやるよ。
澄子　（かづ子へ）行こうか？
かづ子　いやよ、あたし……
澄子　ねー宮野さん。映画へ行かない？
宮野　映画よりあっちへ行こうよ。
かづ子　好きねえ。（笑う）
清吉　うちの野郎もやっと一人前になって、やれやれと思っていたら何のことだい。兵隊にとられて死んじまいやがった。うちのばあさんの愚痴じゃあねえが……
竹内　つまらねえ戦争をやったもんさ。
おくめ　ほんとにねえ。負けるときまっていたらはじめからやらなきゃいいのにさ。
沼沢　なーんて、おくめさんだって国防婦人会の襷か何かかけて飛びまわっていたじゃねえか。
おくめ　そんなこといや誰だってそうじゃないのさ。
竹内　勝って来るぞと勇ましく――か。ふん、ばかにしてやがらあ……
関田　あんときは誰も負けるとは思わなかったからな。（丁合いをしている年配の製本工へ）おい甚さん、あたれよ。あたらねえか。
おくめ　ほっときなよ。
竹内　精出してみたって、どうせなくなる仕事じゃねえか。
年配の製本工　（手先を休めて）どうせ切れる仕事だから、早くあげようと思ってさ。
おくめ　（小声で）ふん、またはじまったよつむじ曲りが……
清吉　さあ……そろそろ出掛けるかな。（工場の隅に積まれた雑誌の前にくる）
宮野　昔は映画でも芝居でも、安くって面白いのが見られたんだがねえ。
清吉　――あと一回かな。（眼で勘定して）おい真の字、ちょっと手を貸してくんな。
澄子　ねえ、行かない？　あの「望郷」っていうの、とてもいいんだって。
かづ子　あたし行きたいんだけど……
清吉　（三人へ）よう！　早いとこ頼むぜ。
宮野　またかいおやじ。のんびりやったほうが利口だぜ。
清吉　早いとこあげちまおうと思ってさ。
宮野　あげじまいで、勘定もらったら一杯飲むか。はいはい。（入口のほうへ行く）
おくめ　ねえ竹さん。太陽印刷のストライキさ。あたしらの仕事がなくならないうちに、早く何とかならないもんかね。
竹内　おれたちが何とかしようたって、どうにもなるもんじゃないさ。こんどのストライキ

は、両方とも腹を据えてかかってるらしいからな。
年配の製本工　太陽印刷の連中がそんなにやりたきゃ、ストでもなんでもやるがいいさ。
おくめ　甚さんはいい金をとる大きな息子がいるから、そんなひとごとみたいなことを言ってられるんだよ。少しはこっちの身にもなっておくれよ。
沼沢　はは。ちげえねえ！
宮野　（丁合いをしていたふみ子と春子へふみちゃん春ちゃん、ちょっと手を貸してくんな。
宮野を左端に入口まで一列にならぶ。春子とふみ子、断截機のそばに積まれた雑誌をリレー式に順々に送る。
竹内　そりゃそうさ。仕事が切れるったって、そりゃなにもおれたちのせいじゃないんだからな。おれたちはその……仕事をしたくったって出来ねえんじゃないか。
宮野　そらよっと。（澄子から受取って次へ渡す）
清吉　はいきた。（リヤカーへ積みこんでいる）
竹内　――こりゃなんだな。正直に……「仕事をしないのに給料はあげられません」「へいそうですか」ってのは、少し能のない話しだよなあ。
年配の製本工　（そばへ来て）何でまあストライキなんておっぱじめたもんかなあ。
竹内　わかってるじゃないか。喰えないからだよ。
おくめ　――喰えないたって太陽印刷の職工さんはずいぶんとってるよ。あたしの隣りの青木さんなんか月二千円はかかさないんだから。
竹内　婆さん。見てきたようなことを言うぜ。そりゃおめえ、残業徹夜をしての話しだろう。
宮野　そらよっと。
関田　定時間だけだったらそんなに取れねえよ。ああいう大きなところは、体も楽なかわり大して稼げないんだよ。あおるかわりにゃ町工場の方が倍もとれるさ。
竹内　だいいち、封鎖じゃしょうがあるめえ。
清吉　おーい、どうしたんだよ。
宮野　お上品だからね。もさもさして間に合わねえのさ。
かづ子　チェッ！　いけない。（束ねた紐が切れて雑誌がばらばらになって落ちる）
竹内　おれたちへばかり五百円生活、五百円生活――ってお題目みたいに唱えたってさ。いまの配給じゃやってゆけるはずがないじゃねえか。あそこは八百円が千円働いたってさ。五百円だけ現金でもらえるだけなんだよ。あとは封鎖小切手ってやつで、強制的に貯金させられちまうんだ。
沼沢　そりゃそうとも。あたしの親戚の奴だって、あそこへ入ってから三年ぐらいになるがやっと千八十円だ。休みでもしようものなら、五百円も家へ持ってくるのがやっとだぜ。
清吉　おそいぞ、おそいぞ。（中をのぞいて）何だってまたそう奥からやるんだよ。入口からやんな。
春子　ちょっと待ってったら。
清吉　手間がくってしょうがねえな。どうも春っぺは奥へ奥へと入れたがるな。
春子　ヤな人ねえ！
ふみ子　おかみさんへ言いつけるよ。
清吉　（節をつけて）奥へ奥へと入れたがーるーウだ。（奥へ入る）
春子　いけすかないったら助平ッ。
関田　そこへ行くと、おれたちのところは、働いただけ現金だからまだいいところがあるんだな。
竹内　そのかわり安いじゃねえか。
おくめ　お前さん。そんなこと言うけどさ。あたしゃまごまごすると、その五百円も稼げないんだよ。
宮野　ほいきた。ゆくぞ。
年配の製本工　ラジオじゃ、近いうちに五百円を七百円にするって言ってるじゃねえか。
竹内　そんなことしたって同じさ。そう言ってるてめえたちがよ、ヤミ屋さんと同じに札ビラをジャンジャン切ってんのに、物価が下るわけがないじゃねえか。することがいちいちシャクに障るよ。
関田　太陽印刷じゃ、世帯持ちで、どれぐらいとってるのかな。
竹内　家族手当を入れると、だいたい平均して手取り千円とちょっとになるんじゃないかなあ。
関田　ふーん。案外いいんだな。

清吉　御苦労さーん。もう一杯だよ。
宮野　さあ、しまいだ。しまいだ。今日は早仕舞いだな。
　宮野、澄子、かづ子、春子、ふみ子たち、それぞれもとの場所にかえる。清吉、リヤカーへロープをかけている。
関田　竹さん、なんだね。それじゃおれたちといくらもちがわないじゃないか。要求するぐらいだからもっと安いと思ってたよ。
竹内　しかし安いことは安いさ。こんど出た要求が通って、やっとうちとおっつかっつってとこだからな。
関田　それでも手取り千円なら悪くないよ。ここだって平均すりゃそれぐらい行くかどうか……
竹内　しかしこんどの要求は給料じゃなくてね。越冬資金だそうだよ。なんでも基本給の二ケ月とかって言ってたぜ。
沼沢　ふーん、凄いな。それじゃ大した金額だよ。
竹内　一人あて二千円ぐらいかな。そのほかに家族一人につき二百円だってよ。なんでも妹の話じゃ、総額で四百万円とかっていったぜ。
　――どうだい、ちょっとケタがちがうだろう。
関田　それだけあれば、なんとかこの冬も一息つけるなあ。
宮野　さあ、一と仕事やるかな。（気のなさそうに綴機にかかる）
かづ子　真ちゃん。ダンスのことばかり考えて手を綴じないようにね。
宮野　ははははは。
竹内　あそこの組合はよくやるよ。何しろ去年の夏から、ずーっと賃上げのしどおしだからな。
沼沢　なんでもあたしの親戚のやつの話じゃ、あそこの組合の幹部ってのは、むかし赤だったそうじゃないか。
年配の製本工　だからすぐに、ストライキだ何だって騒ぎ立てやがるんだよ。
おくめ　ストライキもいいけどさ。仕事がなくなればあたしらまで迷惑するんだからねえ。
竹内　しかしあの連中の言うことをよく聞くとね、喰えるだけの給料を払えってのは労働者の権利として当り前のことだからな。
年配の製本工　ストライキなんて悪いことだよ。そんな奴は会社でクビにしちまえばいいんだ。
竹内　悪いことじゃないよ！　なんで悪いんだい。
年配の製本工　悪いことじゃねえか！　ストライキばかりやってて……それで会社がつぶれでもしたらどうなるんだい。あそこの連中は会社に稼がせてもらってるって気持がないからだよ。
竹内　それが悪いって言うのか？
年配の製本工　そうじゃねえか。働きもしないで年中ガアガアガアガア騒ぎ立てやがる。
竹内　とっつあん。おれだって――騒ぎたてるのは嫌いだよ。しかしおれに言わせりゃ会社が悪いよ。
年配の製本工　な、なんで会社が悪いんだい。
竹内　組合がストライキをやる前に、どうせ出る金なら出してやりゃ何のことはないじゃねえか。
関田　まあまあ、――そうも行くまいけどさ……
竹内　だいたいあそこの重役は、紙の横流しでずいぶん儲けてるって話だぜ。
年配の製本工　自分の紙を売る分にゃいいじゃねえか。それぐらいの腕がなきゃ、重役なんかになれないさ。
おくめ　そうかねえ。（竹内へ）竹さんもうおよしよ。
清吉　（ロープを掛け終ってそばへ来る）さあ、今日はこれ一回で上りだな。
おくめ　外は寒いからねえ。よく温って行った方がいいよ。
清吉　（煙管を出して一服つける）いや、出た時は寒いがね、歩き出すとけっこう汗が出るよ。どうもこの頃は喰い物が悪いせいか河童坂を登るときはほんとに骨だな。
おくめ　もっと少く積めばいいじゃないのさ。清さんも無理しちゃ体をこわすよ。
清吉　そう言ってくれるなあ、おくめさんだけだってよ。
おくめ　なんとか言ってるよ。
澄子　（作業台で未成品の雑誌を見ていた春子とふみ子のそばへ行って）――ふみちゃん、『新女苑』

の二月号まだ出ない？
ふみ子　まだ来ないわよ。
澄子　そう――あたしあの中のね、「若き未亡人」っていうの毎月読んでるのよ。
春子　（そばから）あら、あたしも読んでるわ。
澄子　あれ、ちょっといいわねえ。
澄子　素敵よ――、ほら未亡人がダンサーになってさ、夫の戦友とね……あら！　これ「例のやつ」じゃないの。
ふみ子　そうよ。
澄子　この雑誌凄いわねえ。
ふみ子　澄ちゃん、面白がってこっそり読んでんでしょ？
澄子　あら！　……ふみちゃんたら……すごいわねえ。（女たち笑う）
　遠くから聞える「インター」の歌ごえが、急に大きく近づいてくる。
　トラックの停ったけはい。唄声がやむと「早いとこ頼むわよ」「まごまごしてると、おいてっちゃうぞ」などの若やいだ男女の話し声が聞える。左腕に腕章をかけメガホンと資金箱を持った竹内の妹道子が入ってくる。
道子　こんちは。みなさん。
宮野　ょウ道ちゃん。そんなにめかしてどこへ行くんだい。
道子　（笑って）新宿へ資金カンパに行くのよ。
宮野　張り切ってるねえ。
道子　そうよ。（アクセントをつけて）働くみなさん。太陽印刷ストライキの資金カンパをお願いします。（箱を前に差出して頭を下げる）
宮野　け！　凄え心臓だなあ。（つりこまれて金を出して入れる）
道子　あら、いいの？
声　いいぞ、いいぞ。（下手奥から聞える）
宮野　（てれて）なーに、今日は勘定日だよ。
　竹内、関田たちもつい金を入れる。
清吉　（関田へ）行ってくるから旦那が来たらそう言っといてくれよ。（リヤカーをひいて去る）
関田　ああ御苦労さん。
澄子　（金を入れながら）道ちゃん、あたしあんたのこと聞いたわよ。
道子　あら……（赤くなる）
春子　今日もまた一緒なんじゃないの。お安くないわねえ。（道子の袖をひく）
道子　なに言ってんのよ。
澄子　（春子へ）――で、しょう……ねえ……
おくめ　道ちゃん、ストライキはどうなったのさ。まあ、こっちへ来てあたんなよ。
道子　こんちは。（そばへ来て）おばさん相変らずね。（竹内へ）兄さんたら自分で頼んでおいて忘れて来たんでしょう？　階下のおばさんからよ。（包みを渡す）
竹内　（受取って）あッ、そうか――どうだ、会社の様子は？
おくめ　ストライキはどうなったのさ。
道子　たたかいいまやたけなわってとこよ。
おくめ　あきれた！　おもしろがってるよ。この娘は。
竹内　組合のほうはどうなんだい。
道子　もちろんがんばるわよ！　こうなったら徹底的にやるまでだわ！
竹内　それじゃ当分は続くなあ。
　中川、事務所の窓をそっと開けて、道子のほうを見守っている。
おくめ　困ったねえ……ストライキもいいけどさ。仕事が切れたらあたしらはほんとに困るからねえ。
年配の製本工　ああ、大きに迷惑だよ。ストライキなんて早くやめてもらいたいな。
道子　（困って）兄さん。こないだの――仕事が切れてもその間の給料は払えっていう交渉はどうなったの？
竹内　うん……うまく行かないんだよ……仕事をしないのに給料はやれない、ってのがおやじの返事なんだ。
宮野　おやじときたら、まったくけちだからねえ。
おくめ　あたしらなんか、どうなったっていいんだよ。
道子　それで……どんな交渉の仕方をしたの？
竹内　どう……って。
道子　兄さんが個人的に話したんでしょう？
竹内　まあ、そうなんだがね……
道子　それだから駄目なのよ。だから組合をつくってね、みんなを正式に代表した交渉委員としてやらなきゃ駄目だわ。いくら口先でがんばっても、その後ろに組合というものがなかったら、どんな小さな要求だって通らない

わよ。
中川　（事務所を出るとそばへ来て皮肉に）道ちゃん。君はここに居た時から見ると、大した偉くなったものだね。
道子　中川さん！　それ、皮肉？
中川　ふん……偉くなったものだと言ってるんだよ。
——短い間——
中川　おい、みんな！　いいかげんにして仕事をやってもらわなくちゃ困るぜ。（事務所に入ると、ぴしゃりと扉をしめる）
道子を呼んでいるらしい、自動車の警笛の音
——
春子　（道子に）中川さん——相変らずああなのよ。
道子　春ちゃん、早く組合をつくって、あまり勝手なこと言わせないようにしなくちゃ駄目よ。
宮野　おやじにゃペコペコするかわり、おれたちへはやたらに威張り散らしやがってさ。気にくわない野郎だよ。
「道ちゃーん。早く来いよーッ」「行っちゃうわよーッ」などと呼ぶ声にダブってトラックの警笛の音。
道子　そいじゃ——こんど来たとき、また話しするわ。（行きかける）
宮野　道ちゃん。遊んで行きなよ。
道子　またくるわ。さよなら。（走り去る）
トラックの動き出すけはい。
宮野　（見送って）しばらく見ないうちにばかにシャンになったな。
かづ子　残念でしょう？
宮野　そ、そんなんじゃあねえよ。
澄子　あらア、うすとぼけてえ。さんざ後を追い廻したくせに。
宮野　ばか！（抱きつくまねをする）
澄子　（声をあげて逃げまわる）
春子　（かづ子へ）ねえ、ほら、道ちゃんね。せん、ここに居た時からみるとずいぶん変ったわねえ。
かづ子　当り前よ。女は恋をした相手によって変るっていうもん。
春子　あら、生意気言ってるわ。道ちゃん……倖せね。
澄子　（投げつけるように）きっと倖せなんでしょ。道ちゃん——どうしてあんな人好きになったのかしら？
春子　あら、澄ちゃんたら嫉いてるわ。
澄子　嫉いてなんかいやしないよ。あんな人……
かづ子　ああ、あたしも恋愛しようかなあ。
ふみ子　真ちゃんと？
かづ子　あら、よしてよ。
宮野　（ふりむいて）なんだって？
ふみ子　いいのよ。こっちの話よ。（笑う）
春子　（竹内のそばへ来て）ねえ竹内さん。道ちゃん——どうなの？
竹内　なにがよ。
春子　道ちゃん——のことよ。
竹内　（笑って）ああ……
春子　妹のことに、兄貴は干渉しないってわけ？
竹内　考えないわけじゃないけど……あいつはおれよりしっかりしてるよ。
春子　いくらしっかりしてたって、道ちゃん、まだ一でしょう。
竹内　そうかな……なに、大丈夫だよ。女たち、好奇の瞳をもって、そばへ集ってくる。
澄子　それに、あの相手の徹男さんとかっていうひと、赤だっていうじゃないの。いまに苦労するわよ道ちゃん。
竹内　そんなことはわからないさ。
澄子　あたし、そんな気がしてしょうがないわ。道ちゃん、いまに泣くわよ、きっと。
おくめ　この娘ったら、ひとのことで余計な取越苦労をしてるよ。そんなこと、一緒になってみなきゃわからないじゃないか。
澄子　そりゃ、そうでもさ。あたしはただそんな気がするって言ってるだけじゃないの。
おくめ　苦労したっていいじゃないか。好きで一緒になる分には、そんなことは覚悟の前だよねえ。
ふみ子　うわア——すごいわねえ。
春子　おばさんも昔は苦労したんだって。
おくめ　ははは。こっちはいま、それどころじゃないんだよ。
澄子　でも……なんだか可哀想だわ道ちゃん。竹内さんたち、二人っきりの兄妹なんでしょ

う。
関田　そういうことも考えなくちゃいけないな。
竹内さんは親がわりの立場だし、いまにどんな間違いを起さないとも限らないからね。
竹内　うん……しかし、道子だってもう子供じゃないし、……白石君はおれより年下だけど、敬服するところがあるんだよ。
沼沢　しっかりしてるようでも、まだ廿やそこらの娘じゃないか。
竹内　まあいいよ。いまのとこ……おれよりはあいつの方が倖せだと思ってるんだ。
かづ子　そうかしら、だって……
竹内　そうさ。あれはね、ただたんにお互いに好き合ったってことだけじゃないんだよ。
澄子　じゃ、どうなの。
竹内　何ていうかなあ。妹のやつに言わせるとね。――二人は共通した考え方と、共通の思想のもとに、同志的愛情でつながってるんだから、どんな苦労をしたって平気だし、またそれが当り前でそのことがかえって二人の悦びなんだって言うんだから、それでいいじゃないか。
春子　へえ――そういうもんかしら。
かづ子　うらやましいわねえ。
澄子　道ちゃんたちの気持、あたしにはわからないわ。
竹内　他人の気持はわからないさ。現に兄貴のおれだってわからないんだから……
澄子　でも、いいことか、悪いことかぐらいはわかるでしょ？
竹内　悪いことじゃないだろう？
春子　悪いことじゃないわよ。
ふみ子　そんなこと、春ちゃんみたいに一概に言えないと思うわ。
おくめ　（竹内へ）この娘たち、嫉いてるんだよ。そんなに他人のこと気に病むより、自分でやってみれば一番いいじゃないか。
ふみ子　どうもすみません。（頭を下げる）
おくめ　あたしがあんたぐらいの年頃には、みんな一人ずつ、いい人を持ってたもんだよ。
かづ子　ワア、凄い。
女たち、声をあげて笑う。折りの内職をしている、ちかよ、はつの二人が折りを包んだ風呂敷包みを背負って入ってくる。はつの顔に、一見してわかる火傷の痕がある。
ちかよ　こんにちは。
はつ　みなさん、こんにちは。
二人、事務所の方へ行こうとする。
年配の製本工　ああ、何だね。
ちかよ　勘定ついでに、折りをもらって行こうと思って……
はつ　おお重い……この頃はほんとにこたえるよ。（背負っていた折りを下ろす）
関田　冗談じゃあねえ。こっちでもらいたいところだ。なあ……
はつ　どうしてさ？　白石さんの話じゃ旦那さんが……
竹内　どうしてもこうしてもないんだよ。太陽印刷の争議のおかげで、こちらもしぜんストライキになったわけさ。
はつ　え！　ほんとうかねえ……
ちかよ　せっかく来たのに、困ったねえ。
沼沢　機械が停っちゃア、こっちもアゴのあがったりさ。
年配の製本工　あいつら、碌でもないことはじめやがってよ。
はつ　（年配の製本工へ）わたしらの仕事も全然なくなるんだろうか？　え？
年配の製本工　――さあ、わからねえな。
はつ　甚さん――いつまでやるんだろう。
年配の製本工　まあ、当分休みだろうな。うちの伜の話じゃ、一ト月ぐらいは続くかも知れねえって言ってたからな。（湯呑でお茶をのむ）
はつ　留ちゃんがそう言ってたかい？　困ったねえ……実はあたし今日は旦那に話してまた前借りしようと思って来たんだよ。駄目かねえ……
おくめ　あんた、冗談じゃないよ。ここでこうして働いてるあたし等へだって、あのおやじは駄目だってんだから。なあ竹さん。
竹内　そうよ。何もこっちが――手前が好きで仕事をやらないわけじゃあるまいし、全部とは言わねえまでも、せめて七割ぐらいは払ったって罰も当るまいに。あのおやじ……
はつ　駄目だってかい。
竹内　あんな丸太棒おやじ見たことがねえや。それで言うことがいいじゃねえか。「そんな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com